

## 北國新聞社賞

### 吃音からもらった勇気

加賀市立片山津中学校一年

小 谷 祐 太

僕は、吃音といって話すときにことばがつかえたり、同じ音を何度もくり返したりします。それは、生まれてくる前に、お母さんのおなかの中で、感染症の疑いがあり、そのことが関係あるのかもしれないと、お父さんが話したことを覚えています。

それで、両親は僕の名前に、神様のご加護が受けられるようにという願いで「祐」という字を入れたということでした。

僕は、保育所から小学校の初めまで、話そうとすると吃音が出てバカにされることばかりかえしでした。そんな時に助けてくれる友達がありました。今思えば自分は幸せ者だなと思います。それは、小学生だった時の国語の時間に、「小さいころのことを、発表しよう」という授業がありました。僕はいろいろ考えた中で、この吃音について、話すことに決めました。その授業をする前から、すでに何人かは僕の吃音の理由を知っていましたが、この時、みんなの前で勇気を出して発表したことで、僕の生まれてくる前のことを理解してくれました。この授業を境にバカにされることもなくなったし、行事で外へ行った時も、助けてくれるようになりました。それからは、学校が楽しくなりました。

そして僕は、小学校の間ずっと、別の小学校にある「ことばの教室」という所に行っていました。そこでは、発声練習をやったりして、少しずつ吃音がなくなってきました。バカにされなくなった理由もその教室に通いつづけたこともあるのかなと今は思います。その教室にいる先生達がとてもやさしくて、吃音が思っているよりも早く少なくなりました。

そうやって先生や友達に助けてもらいながら、小学校を卒業しました。

中学に入るころには、もうほとんど、吃音がなくなっていたから、バカにされる心配は全くないと思っていたが、道徳の授業で僕が発表した時、吃音が出て、それを聞いたクラスの人に笑われて、今までで、一番くやしい思いをしました。そこから、もしかしたら、中学でもいじめられるかなとむかしのことを思い出しても心配になりました。でも同じ小学校だった友達が、

「別にあんなの気にせんでいいよ。」

と言ってくれてその時も助けてくれました。

中学に入学してからしばらくした時に、あらためて、なんで自分には吃音があるんだろうと、考えました。もし吃音がなければ、バカにされたり、笑われたりもしないのと思ったからです。いくら考えても、答えが出るわけでもないのですが、自分なりに出した結

論は、むりに直そうとか意識をせずに自分の姿、そのままいこうと思いました。

僕は神様のご加護が本当にあるのかないかわからない中で生きています。神様のご加護とは、友達や先生などの助けのことなのかもしれません。

いじめられていたとき僕は学校になんか行きたくない、学校に行ってなんの意味がある、学校に行くぐらいなら、家にいて、まじめに自分で勉強する、そうすればいじめられたりしない、なんて思ったこともありました。

今思えば学校に行くことで、友達がいるし、家ではできないような話もできるし、何より自分のことを理解してくれる仲間がいて言いたいことがちゃんと言えるから、学校が今はとても楽しいです。

最後に今の僕の夢は、小学校の先生です。学校がいやでいやでしょうがなかった時もあるけど、やっぱり学校は楽しいです。吃音のことでバカにされたり、つらいこともあったけど、わかってもらえたことで、勇気が出て、今の自分があると思います。学校が嫌だ、学校に行きたくないと思っている人の力になれるような小学校の先生になりたいです。

他の人にこの夢をいったら、「おまえすごいな」と言われたので、まだ先は遠いけど、とてもやる気が出ています。

もしだれかに吃音のことでその夢のことが否定されてたとしても、だれかにバカにされても、それは助けてくれる人がきつといる。だからぼくは、夢にむかって生きていく、今つらい思いをしているみんなも夢をもってほしいということを子供達に伝えていけるような小学校の先生になりたいです。

神様のご加護の神様は友人であり先生であると思ったが、ぼくを支えてくれる両親が神様なのかもしれない。

ご加護は夢のことなんだと思う。実現するのは、ぼくなんだ、それが「祐」という名前にある意味なのかも知れないと思う。